

研究動向・近況報告

金 基 淑（研究科長）

ここ数年韓国でのフィールドワークを行うことが多くなった。グローバル化時代を迎え、韓国社会もさまざまな分野において変化・変革が起きており、文化人類学的な観点からみて興味深いテーマが多い。私が最近とくに関心をもって調査を続けているのは韓国における「多文化家庭」（韓国では国際結婚による家庭をこう呼んでいる）である。2000年代以降急増している韓国の国際結婚は、地方に住む韓国人男性と東南アジア出身の女性との結婚がとりわけ多い。こうした結婚のほとんどは結婚相談所や仲介者を通じて行われているが、短期間での成婚ということもあって相手の言葉や文化についての知識や理解がないまま結婚生活をはじめることが多く、さまざまな課題を抱えている。こうした結婚によって韓国で暮らすことになった東南アジア出身の女性たちがどのように韓国社会に適応し、また韓国文化を受容していくのかなどについて現在お話をきいているところである。彼女たちのストーリーをまとめるまではもうしばらくかかりそうである。

橋本 和也

2018年3月をもって定年退職をいたします。

大学院での最後の指導学生は陳珺珺さんで、その前が杜魯華さんでした。2人とも研究意欲が旺盛で、特に陳さんは次から次へと新しい資料を探し出し、自分の研究を推し進めていました。現在奈良女子大の博士課程にいますが、このまま邁進していった欲しいと思います。

私の研究といたしましては、ここ数年の成果が2018年前期にまとまって出版されることになりました。退職記念最終講義（タイトル「地域観光論への思い」）の日付で出版される『地域文化観光論—新たな観光学への展望』（単著・ナカニシヤ書店）、また長年、人類学研究者による新訳を望んでいた『ホスト・アンド・ゲスト—観光人類学』（ed.by V. Smith）が市野澤・東のお二人と橋本の監訳で14名の人類学研究者によってミネルヴァ書房から出版されることになりました。退職記念シンポジウムでは「ホスト・アンド・ゲスト再考」と題して翻訳に参加された方3名の発表と、コメンテーター3名でパネルディスカッションがおこなわれます。同タイトルでの文化人類学会のシンポも予定されています。2013年4月～2017年3月までの観光人材に関する科学研究の成果も『人をつなぐ観光戦略—人作り・地域づくりの理論と実践』（遠藤・堀野・金武・森・片山・山田・滋野・橋本による共著・ナカニシヤ出版）として2018年5月に出版の予定です。

たまたま定年を機会にこれまでの研究活動の成果がまとめられることになりましたが、最後に忙しい日々を送れることを幸運に思っています。科研の分担者としてあと2年調査研究ができます。観光学術学会の会長の任期もあと2年継続します。すぐには活動停止にはならないようです。

松田 凡

2018年3月末で大学を退職することにした。理由はいくつかあるが、一つには、本年の4月で60歳になるのを機に今までの自分の人生を振り返り、研究者・大学教員とは違う世界に触れてみたいと考えたこと。もう一つは、最近10年以上エチオピアでの現地調査ができず、次の10年を研究者として仕事をしていくことに無理を感じるからである。したがって、退職後は研究者として学問の世界に関わるつもりは、今のところない。

後者の理由については、近年の大学をめぐる教育・研究環境の変化という背景もあるが、自分自身の研究者としての生存戦略の失敗という側面もある。つまり、研究テーマや研究方法を変える、あるいは大学の管理運営業務や教育と研究との時間的・エネルギー的バランスをうまくとるなどの、ある種の器用さを自分は持ち合わせていなかったということだ。そのことは残念だが、今更深く追求しても得るものはないと思う。

4月からは文化人類学の研究者という看板は下ろすが、文化人類学を通して見てきた世界に自らの身を埋め戻すというつもりでいる。身近な場所にも真摯に生きる人びとが作る豊かな生活者の意味世界は存在する。自分も誇りを持ってその一員になるということが、私が40年間文化人類学を学んできたとりあえずの帰結である。

最近書いたもの

<書評>

吉田早悠里著『誰が差別をつくるのかーエチオピアに生きるカファとマンジョの関係誌』、『文化人類学』82巻1号、2017年

鶴飼 正樹

昨年の紀要にも書きました、「謎の少女歌劇団」の研究を進めています。少女歌劇団の本社があった大和郡山市と、支社があった宮崎市に足を運び、図書館での資料収集や、関係者へのインタビューを続けています。

大和郡山市立図書館では大量の写真が見つかりました。国会図書館はじめ、各地の公共図書館に足を運び、新聞のマикроフィルムやデータベースと格闘した結果、少女歌劇団が日本各地に残した足跡も見えてきました。戦前・戦中は台湾、朝鮮、満州でも公演していたことも明らかになりました。また、宮崎市では経営者だった男性の孫にあたる人に会うことができました。経営者だった男性は、松本清張の『けものみち』に登場する弁護士のモデルになっています。元少女歌劇団員の女性とも連絡が取れ、インタビューを続けています。さらに、母親が戦前に元少女歌劇団員だったという女性から連絡をいただいたり、私の祖父の従兄弟にあたる男性が、少女歌劇団の舞踊の振付をしていた人の伝記を書いていたことがわかったりと、まるで何かに導かれたかのような出会いが続いています。

20年ほど前に百万遍の古本市で見つけた絵はがきから、まさにおどろきの展開！ 埋もれていた少女歌劇団の歴史が、ようやく浮き上がってきました。

この年になって、新しいことを始め、やりとげるのは容易な道でないことを覚悟しています。逆にいえば、まだチャレンジ精神が私の中にあることに、それなりの誇りと自信を持って、研究を進めていきたいと思います。

なるべく早く、みなさんに成果をお目にかけたいと思っています。

杉本 星子

昨年度から今年度にかけて、京都市の「向島ニュータウンのまちづくりビジョン推進会議」の業務に追われています。つついフィールドに入り込みすぎて地域の方々と一緒に動いてしまうのは、人類学者の悪い癖だとわかりつつ……。学生たちと留学生の日本語クラスを始めたり、ラジオ・タウン誌・ホームページで向島の魅力を発信する情報チームづくりに取り組んだりしています。

研究の方では、あいかわらず日本・インド・マダガスカルのシルク・テキスタイルの調査をしています。先日丸善から出版されたインド文化事典の「ファッションと手工芸」の章の編集を担当しました。本は高いから買わなくてよいけど、けっこう読み物として面白い事典なので本屋でのぞいてみてください。金先生も書いておられます。